

里親養育における ケースマネジメントとはなにか？

関西学院大学人間科学部教授
芝野松次郎

ケースマネジメントは BSWの仕事？

ケースマネジメントという言葉は、社会福祉の中で比較的新しいと言われていました。私は1983年に今の関西学院大学で教えることになりました。数年しまして私の恩師であるアーサー・シュワルツという先生が日本にやってきて、「日本で新しいケースワークの方法としてケースマネジメントを考えていくような機運が高まっています」というような話をしたことがあります。その時に、シュワルツ先生が言われたのは、「ケースマネジメントは、ソーシャルワークじゃない。BSWのすることですよ、MSWのすることではありません」と言われたのです。BSWというのは、Bachelor of Social Work。学部でのソーシャルワークを勉強した人のことです。そしてMSWは、Master of social work，大学院でソーシャルワークを勉強した人。アメリカではMSWがClinical Social worker 治療的な実践をする人、あるいはAdministration という政策的な仕事をする人です。だから、MSWはケースマネジメントをしてはいけないとおっしゃった。

一週間ほどして私のところにパッケージが届いた。そこにはたくさんの論文が入っていました。ケースマネジメントはソーシャルワークではないという論文がいっぱい入っていたのです。驚きました。

ケースマネジメントは非常に重要な方法で、これまでケースワーク、グループワーク、コミュニティワークにつぐ新しい方法なのだというふうに考えていたのですが、水をかけられたという感じがしました。

大阪市立大学の白澤政和先生を中心にケースマネジメントの研究をはじめられて、そのうちにケースマネジメントという言葉がなくなって、ケアマネジメントという形になりました。で、ケアマネジメントという言葉にはいろいろ議論があるところですが、白澤先生のブログを読みますと、なぜケースマネジメントがケアマネジメントになったかという事情が書いてある。

「ケースマネジメントとは何か？」 アウトライン

- I ケースマネジメントの始まり
- II ケースマネジメントの実践理論
- III 岡村理論とケースマネジメント
- IV 空間的CMと時間的CM、そしてPEIM
- V PEIMとしての里親支援専門相談

当時の医療保健福祉という中で、特に介護の領域でしっかりと福祉を築いていくために、ケアマネジメントという言葉を使う必要があったんだということです。それまでは大方の方は、

なぜケースマネジメントと言わないかという
と、ケースをマネージするというのは、人を物
のように扱っているように聞こえるのでよくな
いという言い方をされていた。本音のところは
そうではなかったんですね。

今日、お話しするのは、ケースをマネージする。
しかし、ケース（人）をマネジメントするの
ではなく、ケースのためにいろいろな「資源」を
マネジメントするということがケースマネジメ
ントであると理解し、そのお話をさせていただ
きたいと思います。

まず、ソーシャルワークの固有の人、その人
の生活、その中で起こってくる問題のとらえ方、
確認をさせていただきます。ホリスという人が
1970年代、ずいぶん昔の話ですが、固有のとら
え方をしています。人と環境とは一体としてと
らえなければならない。人と環境のどちらに重
点を置くというわけでない。ホリスは「ゲシュ
タルト」という言葉を使っています。ゲシュタ
ルトという言葉は、「ひとつのまとまり」とい
うことです。ホリスは、このときの
環境には、「状況 (situation)」
という言葉を使っています。後にジ
ャーメインという人が環境という
言葉を使っており、それはエコロジ
ーの考え方から来ています。

この図ですが、右肩が切れている
四角全体が環境、その中に人がいて、
生活をしている。生活をしている中
で環境とのやりとりがある。環境と

のやりとりを「相互作用」と言っています。日
頃、何の気なしに生活していますが、真空の中
で生活しているわけではないですね。自分の
周りのものとかかわりながら生きています。

皆さん、今朝早起きしてこちらにでかけてこ
られるときにおそらく、家族の方、近所の方等
と関わってこられたと思います。電車に乗った
りいろいろな交通手段でこられたと思いますが、
それらすべてがやりとりで、そうしたやりとり
をしないとここまでたどり着けないはずで
す。何のやりとりもしなくて私はここにいるのだ
という方はいないと思います。人の場合は、社会
的環境、人の環境ですね。これは非常に重要で
す。いろいろな関わりをもってみなさんここに
おられると思います。物や建物、自然といった
物理的な環境もあります。

ちょっと難しいのが、見えない環境がありま
すね。文化、価値という環境です。見えないの
ですが、いろんなところに反映されています。
例えば、みなさんの家にある畳です。物理的環



境とっていいと思いますが、アメリカに行く
とないですね。日本の文化の中で見いだされた
もの。あれは重要でこれはあまり重要でない
か、これはいいとかこれはいけないとか、そう
いう価値観をもって私たちは生活している。ず
っと以前、30年ほど前になりますか、家庭養護
促進協会の前の前の理事長の岡村重夫先生とお
話をしているときに、「見えない環境というの
が、非常に重要なんだ」とおっしゃった。高齢
者というだけで社会に住んでいる人たち、どう
いう風に見るだろうか、どんな風に考えるのだ
ろうか、それは見えない環境である。その中に
は価値観も入っている。岡村先生は、和辻哲郎
を重要視し、風土の重要性を語っておられまし
た。

ケースマネジメントの始まり

ケースマネジメントの始まりを考えてみます。
これは、アメリカで始まったのだと思います。
40年ほど前になります。施設処遇というところ
から、地域を基盤とする処遇に変えていこうとい

う時期がありました。これは、いろいろな動機
があるのですが、施設というのが実は法的に束
縛された環境である。いろいろな法的な縛りが
ある。介護施設にしる、あるいは児童養護施設
にしる、法律的に縛られている。そういう中で
生活するというのは、最善のものではないので
す。子どもの最善の利益ということを考えると、
最も拘束されていない、法的な縛りのない環
境で暮らすこと、それが何かというと家庭とい
うことになる。子どもは家庭の中で親の監護を
受けます。つまり親からスーパービジョンを受け
て大人になっていくんですけど、それほど強い
縛りはない。施設の場合は、施設の公的な役割
というものがありますので、子どもたちを援助
するという点に関して縛りがあります。そう
いう状況から地域を基盤とした援助へと方向転
換がなされた。地域の中で家庭で生活をしてい
くということですね。特に精神障害者の場合、
問題になりました。精神障害者に対する地域で
の継続的な援助、ということに地域を基盤とす
る援助というのが重要だという風になりました。

長期的ケア、ロングタームケア
LTC といわれますが、LTC を実現
するためには、地域でやっていかな
いといけない。1978年、今から、
30年～40年前ですけど、アメリカで
は、「発達障がい者の訓練と人権宣
言」と1980年の「精神衛生体制
法」というものが、この精神障害者
に対する地域での LTC に法的根拠
をあたえるということになりました。
70年 HEW,これは Health

I ケースマネジメントの始まり

2 米国では「施設処遇」から「地域を基盤とする援助」へ

- ・精神障害者に対する地域での継続的な援助に不可欠。
- ・1978年「発達障害者の訓練と人権宣言」と1980年「精神衛生体制法」により法的根拠が与えられる。
- ・70年代、HEW(Health Education Welfare)は援助サービスの統合を積極的に進めるプロジェクトを開始。
- ・このプロジェクトにおいてサービスの連携・調整を行うキーパーソンを「システム・エージェント」と呼ぶ。
- ・70年代後半、NIMHは19の州においてコミュニティ・サポート・システム(CSS)を実験的に助成。地域の核となる機関を指定、精神障害者のニーズ把握とサービス提供機関の連携。キーパーソンを「ケース・マネージャー」と呼ぶ。
- ・80年代には36州の地域精神衛生サービスにCMを義務づけ。

Education Welfare、日本でいう厚生労働省にあたるものですが、援助サービスの統合を積極的にすすめるプロジェクトを開始することになりました。地域の中でいろんな援助がバラバラに存在しているというのは効率的ではない、効果もあがらないだろうということでもとめていこうというプロジェクトを開始しています。

このプロジェクトにおいてサービスの連携のキーパーソン、中心となる人、鍵となる人を「システムエージェント」という風に呼びました。このシステムエージェントが、ケースマネージャーの出発地点であるということなのです。地域の資源をまとめていく。統一していく。70年代後半 NIMH 精神衛生に関する研究所、国立精神衛生研究所、これがアメリカの19州でコミュニティーサポートシステムというのを開始します。CSS と呼ばれます。

CSS というコミュニティーサポートのシステムが出てきたころより少し前、1963年にケネディ大統領が暗殺されるという事件がありました。そのケネディ大統領の姉が精神障がいをもっておられるということで、その地域の中で長期的にケアしていくという体制ができていなかったということをケネディ大統領は非常に重視しました。それを統括するような組織を作らないといけない。アメリカの行政区の群と呼ばれるものですが、人口300万人ぐらいのものでですけど、余談ですが私が長いこといましたシカゴという町は、イリノイ州クック郡にありました、そうした郡に一つという形で精神衛生センターがあります。この精神衛生センターがいろんな資源

をまとめていくという役割をしています。コミュニティサポートシステムの先駆けです。地域の核となる機関を指定し、精神障害者のニーズ把握とサービス提供機関との連携つまり、ニーズとサービスとの連携、あっせんと言ってもいいかもしれません。そのキーパーソンがシステムエージェント、つまりケースマネージャーです。ということは、地域の中で暮らしている精神障がい者の方が生きていく時、その環境とやりとりをしながら生きていく中ででてくるニーズを把握して、それにふさわしい地域のサービスと結びつけていく。それを精神衛生センターはしなくてはいけない。そこで仕事をするキーパーソンがケースマネージャーです。これがケースマネジメントの始まりで、この言葉が使われたということになります。80年代に36州の地域の精神衛生センターにケースマネージャーを置かなくてはならないという風にしたのです。今では全州でケースマネージャーがおかれているという形になっています。機能しているかどうかは、ちょっと問題もあるのですが。そこで、こういうアメリカでのケースマネジメントの発展を少し違った角度で見たいと思います。

人の問題を

空間軸と時間軸でとらえる

実践理論から見ていきます。その時に重要だと思うのが、人の問題を空間と時間軸でとらえる必要がある。先程来お話をしています、CSSにしる、ケースマネージャーにしる、空間的なとらえ方をしています。環境の中に人がいて、

環境と人とのやりとりということになるわけ
 です。その生活空間の中にたくさんの重要なも
 のが存在します。社会資源と言ってもいいかも
 わかりません。家庭も一つの資源ということに
 なります。みなさん現場で仕事をされるときに、
 家族を対象として仕事をされている方は家族
 の全体像をつかむためにジェノグラムという
 ものを作られるかと思います。誰と誰が結婚し
 てその子が誰でという風な形でグラフ（図）を
 作られるかと思いますが、同時にエコマップを作
 ったりすることがありますね。その地域にどん
 な資源が存在しているかというのを配置してみ
 るのです。地図上にしっかり配置するというの
 でもいいのですが、みなさんが援助するときに
 必要になるのは、おそらく援助の対象者、利用
 者や家庭を中心にしてちらばっているいろんな
 資源をちょっと並び替えないといけない。学校、
 病院、児童相談所、児童養護施設などがその人
 を中心としてどうちらばっているのか。その資
 源との関わりを線で示しますよね。強いつなが
 りを2重線にして、一方的なつながりである場
 合は、点線で示したり工夫をされていますが、
 時間を止めているのですね。時間を止めて、人
 と空間の中にある資源をみている。この考え方
 は非常に重要です。と同時に私たちは生きてい
 ますので、時間は流れていくのです。変化して
 いきます。空間のつながりは同じようであるわ
 けではないのです。どんどん変わっていくので
 す。皆さんのご家庭でもお子さんが小さいとき、
 まだ学校にあがるまで保育所や幼稚園という
 ところのつながりは重要になってくるとおも

Ⅱ ケースマネジメントの実践理論

1 人の問題を空間軸と時間軸で捉える

・空間軸：生活空間としての家庭、学校、地域 etc.

・時間軸：生活時間として人生。

人生における福祉：福＝しあわせ

祉＝神から授かる幸福

Welfare: fare well (健康でしあわせに旅をする)

2 エコロジーの概念と人の適応能力(C.B. Germain)

・エコロジーは人と切り離せない環境。

・環境は人の適応能力を育むが、損なう場合もある。

・地域(環境)にある医療・教育・福祉などの資源をネットワー
 クとして捉えると、個人と資源NWの力動的な関係が見える。

が、お子さんが小学校に入り、高学年になると
 変わってきます。

私たちは人生の中で変化していつている。時
 間の流れがあるということなのです。この時間
 の流れの中で私たちが求めているのは、福祉と
 いうことで、福は幸せ、祉は神様から与えられ
 た、授けられた幸福と言われていました。幸せを
 求めるということですが、この福祉を英語でい
 うと、**Welfare**。これはよくないと言われてたりす
 るのです。**Welfare** というのは、**Safetynet** と
 いう感じがするところもあります。英語では、
On Welfare という言い方をします。福祉の
 お世話になっているというのは、なんとなくそ
 れ自体に良い印象をもたれないということがあ
 ります。これは間違っていると思うのですが、
 最近は **Welfare** の代わりに **Wellbeing** という言
 葉を使っておられるのではないかと思います。
 でも、私 **Wellbeing** 嫌いなんです。**Welfare** を
 使っています。**Fare** というのは、旅なんです。
 人生を旅する。そして **Well** というのは、**well**
 ですから、健康で幸せということ。健康で幸せ
 に人生を送るということが **Welfare** であるとす

ると、Wellbeing というのは、現在進行形で、今の状態ということですから、それよりは、状態を示しているものよりはいいのではないかと考えています。Welfare という言葉を使いますが、この中に時間の意味が入っています。旅をするということですね。旅をするという時間の流れが非常に重要である。ケースマネジメントを考えると、空間軸と時間軸を考える必要があると思います。さっきのロングターム (LTC) 「時間軸」が非常に重要になってきます。この空間的な部分は、いろんな人がいろんな理論を持っています。ソーシャルワークの理論として、もっとも使われているものが、ジャーメインらの「エコロジー」と「適応」という考え方だと思います。ジャーメインは、エコロジーは、人と切り離せない環境であると言っている。エコロジーという言葉はいろんな風に訳されますけど、難しいのでエコロジーとしておきたいと思います。これは、人はある空間の中に、環境の中に住んでいるわけですが、そこで生活するというのは、真空の中で生活するわけではない。エコロジーは生態学の領域でいいますと、肉食動物というのは、草食動物がいて、生活できる。草食動物は食べる草があって生活できる。ある環境の中で一定の植物、一定の草食動物、一定の肉食動物、というものがバランスをもって生活している。草食動物が増えすぎ、草がなくならないように、肉食動物は適当に草食動物を食べる。微妙なバランスです。肉食動物は環境からそうした役割を期待されている。草食動物も期待されている。その期待にそって植物を適当に食べると植物がよく育ち本来の働

きをするということによって、エコロジーは維持されるし、そこに住む動物は元気に生き、適応している。私たち人間の社会でも援助をしようとしている人たちが、どういう役割期待をまわりから受けて、それをどう果たしていくのか。まわりからの役割期待とその人の持っている役割を果たす能力が合わないと悲惨なことになります。環境から過剰な期待や、過小な期待しかないとその人は、幸せじゃ無いんですよ。Well に Fare できない。

ある男の子が元いた小学校では、非常に元気でリーダーシップのある子だと思われていて、その子もそれに応えるだけの力があつた。すごくハッピーだった。ところがお父さんの仕事の関係で別の学校へ移った。そこで初日不安だったので、泣き出してしまった。そうしたら周りの子たちが、「この子は泣き虫」というレッテルを貼ります。ところがその子自身はリーダーシップがあつて、明るい子だった。違った役割期待を受けてその子は悩みます。体の症状になったりする。そうするとますます元気がなくなる。ある意味で周りの期待に応えているような行動をしてしまう。泣き虫な子になってしまうのです。

「予言の自己実現」という言葉もありますが、周りの期待に添ってしまうようなことになり、どんどんと居場所がなくなってしまう。ジャーメインは、「環境にははぐくむ力もあれば、損なう力もある」と言いました。本来ははぐくむ力があるべきなのでしょうが、それがなく、環境としてのまわりの子や先生や親が子どもの適

応能力を損なうような形になってしまってる。子どもと環境とのやりとりですね。その部分を見るのが重要なんだってジャーメインは言っています。

こういう考え方は、ソーシャルワークでは主流ですね。それまでのソーシャルワークでは問題行動があると、その人の問題と考えて原因を探ろうとする。その子の生育歴を探る、その子が何らかの障がいを持っている、原因を探って原因を突き止めると症状として表れている問題を治すことができる「治療モデル」「医学的モデル」だったんですけど、ジャーメインは「生活モデル」だと言います。それが一番ソーシャルワークらしいと。そして、それが主流になっています。個人を中心にして図のような形で地域の中にいろいろなその人のニーズを満たしていく資源が存在している。その資源がネットワークを構成している。エコマップを書くときよくわかりますよね。それを上手に活用していくということをジャーメインは言いました。

ケースマネジメントの実践理論

次にケースマネジメントそのものの実践理論についてお話をしたいと思います。

ひとつは、ルビンのモデルです。このモデルも相当古いです。こんな風に言いました。「ケースマネジメントは、次のような働きをします。それも時間の流れの中でアセスメントをします。ニーズを包括的に把握する。そして、それにも

とついで地域の資源をどう活用するかという計画を立てます。援助計画を立てる（プランニング）。そして、その計画に基づいて、ニーズと資源をつないでいく。それをルビンが「リンキング（リンクする）」と言いました。そして、その援助が行われるときに、リンキングが計画通りに行われているかどうか、必要なサービスが必要な時に提供されているのか、利用者がそれをちゃんと利用しているかどうかとか、利用者の満足は得られたのかどうかというようなことを評価する。すなわち、ケースマネジメントは、アセスメント、プランニング、リンキング、モニタリングだと言いました。

これを、何十年か前に大阪で社会福祉研究会というのがあったのですが、そこで岡村重夫先生を中心にしていた勉強会で発表しました。岡村先生は一言、「ケースワークとどう違うんや！」と言われた。「一緒ですね」と答えるしかなかったです。大阪の勉強会はおもしろかったです。みんな一生懸命勉強していくんです。そして、発表するのですが、いつも岡村先生に一言言われて終わる。ケースワークはもともとケースマネジメントをやっていたんですね。そしたら私の恩師の一人であるアーサー・シュワルツ先生が大間違いをしていたということになります。当時のMSWの人たちはみな間違っているということになります。みんな、治療モデルが好きで、治療者になりたい、ということを目指していたことになりすね。

スコットブライヤーという人は、ソーシャルワーカーは、「いろんな帽子をかぶらないとい

けない」ということを言いました。その一つが治療者です。セラピストの役割です。今でも一番人気があります。

MSW (修士号) にとって、いろんな州で資格を認めてもらうと、開業を目指すことになります。未だに結構そういう方がいます。シカゴでもある日本人ですが、東京外大を卒業して、シカゴ大を卒業し、MSW を取得して、個人開業していました。個人開業をして何をしているかという、分析をしている。精神分析みたいなものですが、精神分析はできないので、それに似たようなことをされてました。テレビに登場しているいろいろ相談にのる Psychologist に似たようなことをしていた。みんな『Popular Psychologist』になりたかったんですね。だけど、本来はマネジメントをするということが非常に重要で、岡村先生は、そのことをずばっと言われたのです。そこで私は岡村理論をもう一度見直すということになります。

岡村理論に学ぶこと

ローズとモアという人の考え方があります。ケースマネジメントはプロバイダードリブンであってはならない。クライアントドリブンであるべきだということです。地域の中の資源を活用することになるのですが、プロバイダーが提供できる資源、活用しやすい資源というものがある。利用者のニーズをそれに合わせるというやり方

はプロバイダードリブンであって、これは本来のケースマネジメントではない。まずクライアントのニーズを考えないといけない。それがクライアントドリブンです、クライアントのニーズがあって、それに合うニーズを探して出さないといけない。もし見合う資源がなければ作り出さないといけないということなのです。

そこで、岡村理論に入ります。岡村先生は社会生活ということと言われ、生活モデルですね。ジャーメインより遙か昔にこれを言っておられ、昭和 30 年ぐらいです。社会生活は人と制度的環境の交渉関連から始まる。交渉関連とは、今の言葉でいうと交互作用です。Transaction ということになります。岡村先生はいつも英語は使うなどおっしゃいました。この交渉関連を社会関係と言われ、「社会関係」というのが岡村理論のキーワードです。この社会関係には2つの側面があります。

この図を見てください。岡村先生の本の中にもあります。真ん中に人の社会生活上の要求があります。健康になりたい、もっといろんなこ

Ⅲ 岡村理論とケースマネジメント

1 「社会生活」

- ・人と制度的環境との交渉関連から始まる。
- ・この交渉関連を「社会関係」と呼ぶ。

2 社会関係の2側面

- ・主体的側面：人から制度への働きかけ、要求と役割遂行。
- ・客体的側面：制度から人への働きかけ、役割期待と資源提供。

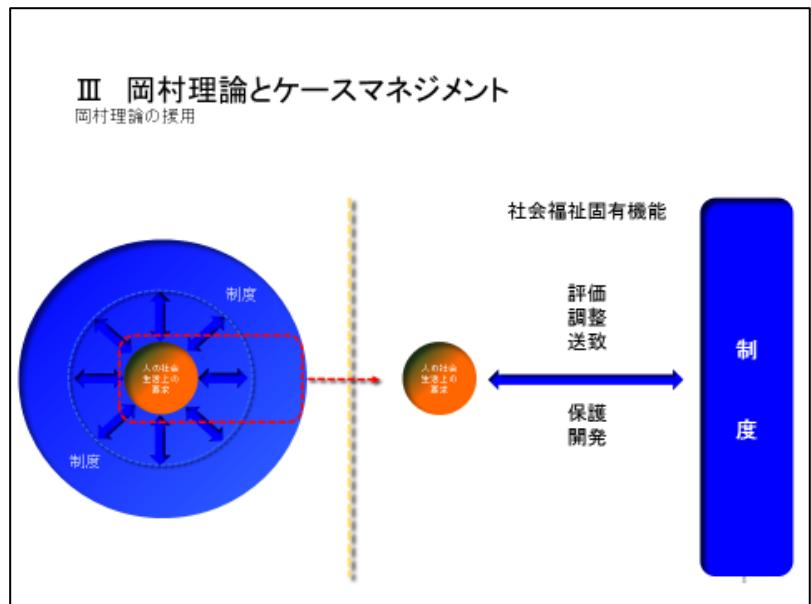
↓
図

とを知りたい、経済的に安定したい、もっと精神的な安定を得たい、いろいろな基本的な要求を持っている。それに対応する制度が環境の中にあると言われていて。健康になりたい場合は「医療制度」、もっと知りたいことがある、学びたい場合は「教育制度」、精神的な安定は

「家族制度」、というふうないろいろな制度がある。自分らしく生きる、自分の中の可能性を追求するというものに対しての制度は、娯楽というものがある。これを大きくしてみますと、人の基本的要求とそれと交渉関連するいろんな制度がある。

私が風邪をひいて頭が痛いというとき病院を訪れます。医療制度の制度的集団として病院というのがあり、そこへ行く。私から制度側に要求を出します。そうすると制度側は役割期待をします。病院に来る人の役割、病人としての役割、何かというと問診票のようなものに記入させられたり、「保険証ありますか」と言われたりする。そういう役割期待に応えないといけない。その役割期待に応えますという、今度制度の方は「治療しましょう」ということになります。私から制度に働きかけるのは、二つありましたね。「要求をする」というのと「役割期待に応える」というもの。これを、岡村先生は社会関係の主観的側面、主体的側面と言われました。制度から私へも二つあります。一つは役割期待をする、そして実際に治療を施すというものです。これを制度側から個人に対する社会関係の客体的側面です。の双方向のやりとりは、相互作用をよ

く表しています。岡村先生はこういう風に言われています。個人そのものに社会福祉が関わることはない。制度そのものに社会福祉が関わることはない。このやりとり、つまり社会関係の問題が起こった時にそれに関わるということです。



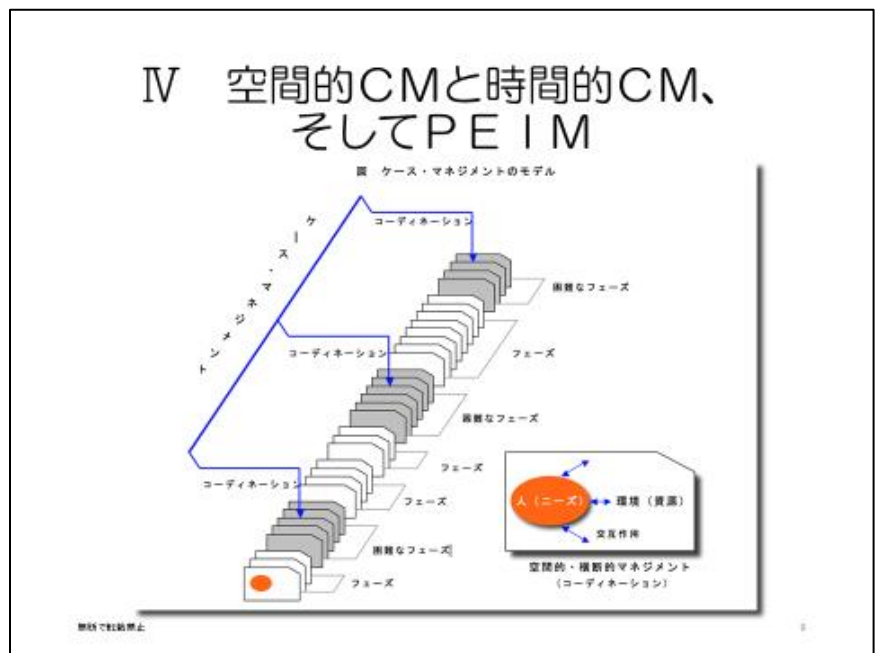
どんな問題が起こるのかというと、ひとつは、360°、円になっているというのがくせものですが、私が病人としての役割期待を果たそうとすると、会社側は、経済的に安定することをしてくれている会社は、もっと働きなさいという。そんなにたびたび休まれたら困るという。「実は、単身赴任をお願いしようと思っていた。」と。そういうことを言われたりすると、矛盾が起こってくる。交渉関連がいくつもあるわけですから、そこに軋轢、葛藤があるわけですから矛盾が生じる。これを「社会関係の不調和」と言われました。それから、ある資源を利用しようとするけれども、どうして利用していいのかわからない。これは「社会関係の欠損」で、ここでは社会関係ができていない。

それから、自分にはニーズがあるけれど、制度ができていないという場合には、「社会制度の欠陥」ということになります。そういう3つの問題を社会福祉はどうするかということで、評価し、不調和が起こっていれば調整し、制度とニードとの間に関係がないとすれば送致をする。制度がない場合には、作り上げていきましょうという「代替」と言われました。福祉が制度のない間その「代替」をするという風に言われています。保護、開発していきましょう。これ、見ていきますとさっきのルビンを似ていませんか。アセスメント、評価です。計画を立ててリンクする、それをモニターしていくということです。岡村理論は早くからケースマネジメントを考えていたといっています。

間が止まった時の一枚のカードと考えてください。実は人生の中には生まれてから死ぬまで無数のこのようなカードが並んでいるという風に考えられます。私、高齢者の仲間入りをさせていただいて65歳になりましたけど、ここから自分の人生を振り返ってみるとたくさんのカードが並んでいたとみることができる。みなさんも、相談に来られた人の生育歴等いろいろお話を聞かれます。それは、その時点から過去をずっと見ることになります。ヒストリーを見るということですね。今度はそこから援助を始めるということを考えますと、そこから新たにカードを一枚一枚作っていかないといけない。このカードを1枚1枚作っていくことをプログラミングと呼んでいます。このプログラミングされたカードの並びは、全体が一つのプログラムです。

私のケースマネジメント

私のケースマネジメントをご紹介します。空間的ケースマネジメントと時間的ケースマネジメントという言い方をしておりますが、最初に出てきました図、人と環境の間に交互作用があってまさに岡村理論なのですが、ジャーメインも同じように言っています。これは時間を止めたときの空間です。これをマネージするということになる。みなさんが相談を受けるというときに、その人のニーズを聞き取ってそして地域の中にある資源とどう結び付けるかというのを考えます。時



私たちが生きていくときのプログラムでそのプログラムの中で私たちは動いている、生きていくと考えることができる。これが人生の旅 (Fare) ということになります。ここで、白い

部分とグレーの部分がありますけど、いつもWellではないのです。幸せ、ハッピーではないのです。時々難しいフェーズがある。頻繁にいい時、悪いとき、っていうのがあると思うのですが、大体みなさん自分でマネジされている。自分でマネジメントをしている。子どもが小さいとき、保育所に入れようかと迷っているときに、大体自分自身で決めていかれると思うのですね。いつ働こうかという風に決める。「子ども・子育て支援」の新システムが始まりますけど、そうすると保育所を利用するための利用認定を受けますね。神戸市の場合、月64時間仕事をしていることが条件になっていますが、どうしてもうまくいかないことが多い。子どもの養育のことを考えているときに、ちょうど親が介護を必要とする時期になってきたということになると、一人でマネジメントできないようになるかもしれない。一人ではマネジできない困難なフェーズの時期が、人生では繰り返し出てくると思うのです。この困難なフェーズのときに、一番この状況をわかっている人、子どもが幼稚園や保育所の時期には、幼稚園や保育所の先生たちがわかっているかもしれない。この資源をうまく取りまとめてくれる人、相談にのって取りまとめてくれる人、そういう人たちをコーディネーターと呼びます。その人がコーディネーションする。しかし、長い時間に渡って、子どもであれば0歳から18歳まで、このコーディネーションの状態を見ていく人がコーディネーターとは別に必要になります。この人がケースマネジャーと私自身は考えています。ケースマネジメントは、長期的なものです。

実は、1991年、四半世紀前に、当時の神戸市の児童相談所でワーカーをしておられた山田さんという方と一緒にケースマネジメントを考え始めた時に、児童相談所のケースマネジメントやコーディネーションということを考えるとどうなるのかということを考えました。児童相談所は長期的なケースマネジメントをしないといけない。そして、保育所であつたり障がいを持っているお子さんをみている機関などはコーディネーションをしていく部分ではないかと、事例研究をたくさん検討し、考えました。そのうちの一部を1991年に発表し、論文を書いています。このアイデアは、そのときのアイデアです。ケースマネジメントは、時間の流れ、長期的な視野を持って考えていくということが必要ではないか。もうちょっと短期的にみるのであれば、それはコーディネーションではないかと考えています。

今、里親支援専門相談員は、里親支援のソーシャルワーカーということになっていますが、「子ども・子育て支援」の方では、利用者支援事業という中でかつての総合コーディネーターという制度が生きているのです。長期的なんです。0から18歳だという風に考えると、子育て拠点とか児童養護施設とか児童相談所とかいうところにおられる総合コーディネーターはコーディネーターではなく、私は「子育てコンシェルジュ」と呼び、それはケースマネジャーだと思います。当面はコーディネーションも両方やらないといけないかもしれない。

PEIM (ピイム) とは

PEIM PはPerson : 人、EはEnvironment : 環境、IはInterface : 接点、MはManagement : マネジメントで、PEIM : ピイムと呼んでいます。ピイムというのは、実はその中に理性的、問題解決的部分があります。冷静になって考えないといけない。その人のニーズをしっかりと把握する。

そしてそれに見合う地域の資源がどのようなものがあるのか把握するのが、理性的にしないとなかなか大変ですので、エコマップのようなものを用意するのです。

私は、子育てコンシェルジュのモデルを開発し、1年間かけて資源データベースを作りました。次世代育成支援行動計画の中で提供されている資源をデータベース化して、それを瞬時に引き出すことができる、ニーズに基づいて検索すると情報が出てくるというものを作りました。そのプログラムをiPadのようなタブレット型の端末に入れてあります。それを持ち運びできる。子育ての相談拠点に相談にこられた方と気楽な形で話をしながらタブレットをみて、その人のニーズをみて、もっと必要な資源(サービス)を選び出すことができるという仕組みを作っています。ソーシャルワークというのは、基本的に人と環境とのインターフェース、岡村先生がいうところの交渉関連、ジャーメインでいうと

IV 空間的CMと時間的CM、そしてPEIM

- 1 空間的ケースマネジメント → 図
- 2 時間的ケースマネジメントは長期的 → 図
 - ・ヒストリーとプログラム
 - ・コーディネーションは短期的
- 3 PEIMの理性的側面
 - ・人と環境の接点における(ケース)マネジメント。
 - ・ソーシャルワークは、基本的にPEIM。
 - ・自己実現する人のニーズを理解し、資源、サービスとしての環境との交互作用、つまり接点(インターフェース)に介入。
 - ・もっとも必要とするときにもっとも必要な資源を確実に提供。
- 4 PEIMの情緒的側面
 - ・よりよい援助関係の構築、里親子に寄り添う援助。

25

ころの交互作用、そこに介入していくということです。

神戸市におけるプログラムの開発

人に直接介入して治療的な働きをするわけではない。あるいは、制度を変えていくということではない。でも、制度がない場合には作らないといけないですし、人に直接介入する制度がないというときには、作り出すことも必要になってくる。私はそれを神戸市では、総合児童センターというところでお父さん、お母さんたちを援助するときに、ペアレンティング、親業を学ぶことを援助するプログラムがなかったころ、27年前に作り始めました。計画的に作り始めて今では5つの講座となっていますがを、0歳児、1歳半、3歳児、そしておねしょのあるお子さん、発達障がいのあるお子さんの親を対象に、子育て支援のプログラムを開発して実際にやっています。だけど本来、こういう直接的介入というのはソーシャルワークの役割ではない。作

り上げたらそれを地域に広めていく。地域の中でやってもらう。今、ふれあい講座は神戸市の120あまりある児童館で提供されています。3歳児のプログラムはもう我々はしていません。児童館の方でしていただいています。0歳児のプログラムは拠点児童館で、区に一つある児童館でやってもらっています。おととしから障がい児のおられる家庭を対象とするプログラムの開発をしています。生活ニーズをしっかりと把握して地域と環境をつなぐこと、リンクする、あっせんするということが重要だということです。これは理性的な側面ですけど、PEIMにはもうひとつソーシャルワークがずっとやってきた情緒的、関係的側面がある、よりより人間関係を作らないといけないということです。

実はタブレット型端末を使うということで人間関係が作りやすくなるのです。資源を探す時にいちいち席を立て、PCで検索したり、資料を取りに行かなくてよいということになります。むしろこのタブレットを話の材料にして、できるだけ相談者に寄り添うということが出来る、ソーシャルワークの基本的な態度というのを、もう半世紀以上も前にバイスティックという人がいっていますが、事務的にニーズを聞き出すという人がいますが、しっかり傾聴し、受容し、聴き取った話の中からその人のニーズを拾い上げていくという形になるかと思います。PEIMということと里親支援専門相談員ということですが、どういう風に関係するだろうか。今、社会的養護の見直しが進んで、里親さんを増やしていこうという動きがあります。そこに書いてありますように、厚生労働省は、里親制度を「家

庭的な環境の下で子どもの愛着関係を形成し養護を行うことができる制度である」という言い方をしています。里親等への委託率が、平成14年の段階では7.4%、それが平成24年3月には13.6%まであがっています。平成26年度には16%にしましょうということですが、実際にはそういう風にはなっていない。今、さっきも言いましたように、社会的養護を変えていこうというときに、里親（ファミリーホームを含む家庭養護）委託を全体の3分の1、30%強まで上げていきたいと思いますということが言われています。ここには、それぞれの年度でどういう風に変化してきたかという表をあげていますが、都道府県の里親委託率がかかっているものです。大阪府、兵庫県、里親と乳児院、児童養護施設という割合をみているわけですが、大阪府、兵庫県、厳しいでしょ。里親委託率をみていると、大阪府7.2%、兵庫県6.7%ということなんですね。滋賀県が30%ということになっています。東の方がちょっと里親さんの割合が高くなっているという状況があります。児童養護施設本体、グループホーム、里親を1:1:1に平成41年までにしていくというふうに15年間かけてやりましょうということになっていく。里親さんをどう増やしてどう援助していくかということです。これをしていかないといけない。したがって、里親支援専門相談員、支援機関がますます重要になってきます。

まとめますと、PEIMとしてのケースマネジメントと、それを行うケースマネジャーは、5番に書いていますが、ユビキタスであるということです。ユビキタスの語源はラテン語ですが

英語では omnipresent という意味で、いたるところにいる（遍在する、広く行き渡って存在する）という意味です。ケースマネジャーはどこにでもいる必要があると思うのです。厚生労働省も同じことを言っている。里親さんたちを支援する里親支援専門相談員が地域に遍在していなければならないの

です。このためには、相当な努力が必要になってきます。それぞれの自治体の中で今、家庭的養護の検討がなされており、その実施計画を立てないといけない。

最後に付録で資料をいくつかつけています。厚生労働省が 2012 年に作成したものです。参考にあげさせていただきました。厚生労働省の HP より取り出すことができます。里親委託をすすめる課題、里親委託推進の方策、良いマッチングのために多数の里親候補がいるということ、里親と児童相談所の支援者の間に信頼関係が成立しているということが重要です。里親委託を伸ばしている自治体では児童相談所での里親委託専任の里親担当者の配置や里親支援機関の充実や里親体験発表会や市町村と連携した広報、NPO 市民活動を通じた口コミなど様々な努力を行い成果を上げている。みなさまもいろいろな取組みをされていると思います。また読んでいただければと思います。

V PEIMとしての里親支援専門相談

- 1 子どもの成長と子育て、そして親の成長は、人と制度の交渉関連・交互作用の中で起こる。
- 2 交渉関連・交互作用に介入し、援助することがSWとしてのCM。
- 3 SWは、クライアント・ドリブン：
「まずはニーズありき」そしてニーズにあった資源の適切な利用を援助。
- 4 「ケアのコーディネート」ではなく「ケースのマネジメント」（ケースのために資源のマネジメントをする。もっとも必要とするときに、もっと必要とされているサービスを提供。）。
- 5 SWerは、ユビキタス(Ubiquitous)＝いたるところ(接点)にいる。
*ユビキタス(Ubiquitous)とは、いつでも、どこでも、だれでもが恩恵を受けることができる
インタフェース、環境、技術のこと。
- 6 里親子に寄り添う援助

最新で転載禁止

11